文脈で読む「身上さとし」（2）

増野正兵衛とその「おさしづ」

天理大学人間学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

本連載では、「おさしづ」における「身上さとし」を個々の文脈に即してみていく。具体的には、まず増野正兵衛を中心とした増野家に関する「おさしづ」を読んでいきたい。

なぜ増野家なのか。増野正兵衛は「おさしづ」の書取人として本席の身近にいた。再三お言葉を仰げる立場にあったからか、他の人に比べて数多くの「おさしづ」を頂いており、身上に関しても割書きに記された病状にはさまざまなものがある。そのため「頭痛」や「胸むかつく」など病状別に項目を立てている『身上さとし』（深谷忠政著）においても、増野家の「おさしづ」は数多く採用されており、その実質的な内容を構成している。増野家に対する「おさしづ」は個別的な事例であると同時に、「身上さとし」に対して豊かな事例を残しているといえよう。

今回は、「おさしづ」研究の前提として、『稿本天理教教祖伝逸話篇』および『増野正兵衛傳』（私家版、1923年）や『先人素描』（高野友治、1979年）に拠って増野家の信仰の経緯について確認しておく。

○増野正兵衛の略伝

増野正兵衛は、嘉永2年（1849）に山口県萩藩士の増野庄兵衛の長男として生まれた。幼年時代は萩の藩校である明倫館で文武を学び、青年時代には明治維新にともなって東京で天皇の御親兵係として勤めた。その後、鉄道員になり、明治7年に神戸の三宮駅に勤務。同じ頃、縁あって春野いとと結婚している。

明治11年に同駅の助役となったが、その頃から体調を崩すようになり鉄道員を退職することになる。その後、神戸の元町に家を建て「東京屋」という屋号で小間物屋を開始。この頃名前も「正兵衛」に改めている。

明治14年頃から、妻のいとが目を患い、ソコヒとの診断を受ける。ソコヒとは、「眼球内に障害があって物の見えなくなる病気」（デジタル大辞泉）とされる。

それから3年後の明治17年、いとは、失明寸前になってしまうが、昔なじみのお蝶さんという人からお道の存在を知る。いとは「夫婦そろって神様に願えば、どんな病気もたすけてもらえる」と聞き、正兵衛にもこの道の信仰を勧めた。正兵衛ははじめは相手にしなかったが、いとの懇願によって心を動かされ、ついにお道の話を聞くことにする。そのとき、お話を取り次いだのは、お蝶さんの父親の小山弥左衛門という人であった。正兵衛夫妻は「身上の埃は八つの埃の心得違が顕はれて、心から病み患ふのである。この八つの理を懺悔すれば、必ず身上をお助け下さるに相違ないから、眞實誠の心になって、神様にもたれよ」[(1)]と諭された。

お話を聞いた翌日、いとの眼はうっすらと見えるようになった。また、正兵衛は明治6年頃から脚気を病み、足が痺れたり腰の立たないこともあったが、そのとき「食事といふても悉く神様の御守護に基づくものであるから、毒となるべきものは一つとしてない」と聞き、神様の力を試すように、その夜にそれまで禁じていた酒を神前に供え、そのお下がりを飲んだ。すると、翌日不思議と気分が良くなった。その後一度は病状も元に戻ったが、夫婦そろってお願いを続けるうちに、正兵衛の数年間の病状は15日ほどで回復し、いとの眼病も30日ほどで全快した。このようにして、夫婦の身上を鮮やかにたすけてもらい、増野家の信仰が始まる。

その後まもなく正兵衛は神戸からの参拝者とともにおぢばがえりした。教祖にお目にかかったとき「正兵衛さん、よう訪ねてくれた。いずれはこの屋敷へ来んならんで」（逸話篇145）とのお言葉を頂く。そして、神戸とおぢばを往復する日々が続いたが、正兵衛はおぢばから離れると不思議と体調を崩すようになり、教祖から「いつも住みよい所へ住むが宜かろう」とのお言葉を頂いた。

それからも正兵衛は熱心に信仰を続け、明治20年頃にはおぢばに詰めるようになっており、教祖が現身を隠された際には教祖の御前に仕えていた。また、同年5月14日に、本席飯降伊蔵より「おさづけの理」を頂いている。

明治21年に天理教会本部が東京に設置されたときには会計兼派出係となり、また、教会本部がおぢばへ移転されるまで東京本部詰の任に当たった。

明治22年の兵神分教会の設置に際して、会長候補となったが、「おさしづ」のお言葉からおぢばで勤めるようになった。明治23年正月からおぢばに住み込むようになり、本部の会計係として、また本席の「おさしづ」の書取人として勤めた。

中河、敷島、日本橋、兵神の各教会の事情の整理、明治34年に教区制度が発足されると第一教区の担当者として教区内の教会を巡回した。そして、大正3年（1914）に巡教地の大阪教務支庁で享年65歳で出直した。

○増野家の「おさしづ」

正兵衛が「おさしづ」の書取人であり、お言葉を身近に伺うことができたということもあって、増野家に頂いた「おさしづ」は他に比べてかなり多い。年代で見ると明治20年から40年まで（明治35年をのぞく）すべての年に「おさしづ」を頂いている。

割書きには、増野家に関わりのある人としては次のような人々が挙げられる。

増野正兵衛／増野いと（妻）／荒木しか（後妻）／増野道興（長男・敷島大教会四代会長・豊繁分教会四代会長）／増野おとも（四女）／増野松輔（甥・正兵衛の姉まちの長男）／増野喜市（甥・正兵衛の姉まちの次男）／増野たけ（妹）／増野いね（姪・たけの次女・兵神大教会清水由松の妻）／春野ゆう（妻いとの母）

また、身上に関しては、割書きには「胸の下障り」「足だるみ」「耳なり」「鼻咳」「口中」「口中歯」「足の先霜焼け」「咽喉腫れ食事通り兼ね咳出る」「歯浮き」「胸むかつき気分悪しく」「目かい」「足のくさ」「咽喉塞ぐようになる」「鼻先一寸痛み」「夜泣き」「腹が下り」「熱強く食事味無き」など多数見られ、さまざまな身上に関して「おさしづ」を伺っていることが分かる。それでは、次回よりそれぞれの身上に込められた神意を「おさしづ」を通して探究していきたい。

［註］

（1）『増野正兵衛傳』（私家版、1923年）、14頁。